

翻訳等価性再考  
—社会記号論による翻訳学のメタ理論研究—

**Translation Equivalence Revisited:  
Meta-Theoretical Analysis of Translation Theories Based on Social Semiotics**

学位取得者：河原清志

授与機関：立教大学

取得学位の名称：博士（異文化コミュニケーション学）

取得学位の方法：課程

取得年月日：2015年3月25日

**英文要旨**

This study aims to give meta-theoretical analysis to translation studies based on linguistic anthropological social semiotics with a view to presenting its entire picture and analyzing ideologies of leading Western translation theories.

Firstly in this study, the basic concept of “equivalence,” as commonly adopted in translation theories, is revisited from the perspective of linguistic anthropological social semiotics based on constructionism. This theory applicable as a meta-theory for translation studies as well as many fields of humanities and social science is the one that connects language and society in terms of “ideology.” Secondly, it categorizes leading translation theories into five groups: (1) linguistics-oriented equivalence theories (e.g. translation shift, translation strategy, translation process), (2) social function-oriented equivalence theories (e.g. skopos theory, polysystem theory, translation norms), (3) equivalence-fallacy theories after the social/ideological turn (e.g. postcolonial theories), (4) equivalence-transcendence theories: translation philosophy and thought (e.g. Benjamin, Derrida, Berman), and (5) theories of translation equivalence-diversity. Lastly, overt social functions of leading translation theories are analyzed from social semiotics, and then covert social functions of those theories are examined which are out of scholars’ consciousness but work as ideologized dogmas or values that are deeply embedded in specific socio-cultural contexts, showing the

---

KAWAHARA Kiyoshi, “Translation equivalence revisited: Meta-theoretical analysis of translation theories based on social semiotics,” *Interpreting and Translation Studies*, No.15, 2015. Pages 221-225. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

conscious and unconscious process of ideologization of socially-embedded symbolic values that affect the construction of translation theories.

## 和文要旨

本稿は「翻訳とは何か」という根源的な問いに対し、「翻訳とは、等価構築行為である」と措定し、主にこれまでの西洋の翻訳研究者による翻訳諸理論の背後に潜む言語や翻訳に対するイデオロギー（意識）を分析することで、当該テーゼの理論的検証を社会記号論に基づいて行った。その中で、翻訳学の諸学説を分析するメタ理論のあり方を素描することを目的とした。

本稿の出発点でもあり、再帰する点でもある〈翻訳等価構築性〉の概念定義は次のとおりである。「翻訳とは、当該行為の社会文化史的コンテキスト依存性(社会指標性)および翻訳者のイデオロギーや価値観(象徴性)を不可避免的に内包しつつ、ある言語テキストを基に別の言語テキストへと社会的な等価構築を行う、非合目的的效果を伴った行為である。」

この〈翻訳等価構築性〉を再考するために採った本稿の構成は次のとおりである。

本稿は翻訳学ないし翻訳研究のメタ理論研究を行うことを目的としているため、まず第1章でメタ理論として援用する言語人類学系社会言語学の妥当性について科学哲学や知識社会学の見地から検討した。

次に、メタ理論を行うには翻訳概念を根本的に支える言語、コミュニケーション、記号、意味などの諸概念についても併せて論じてゆく必要がある。そこで第2章においてこれら諸概念を包括する研究分野である記号論を説明し、必要に応じて認知言語学・意味づけ論を導入しつつ、それだけでは限界があって捉えきれない翻訳の社会行為性(特に創出的な社会指標機能)に照射して議論を展開するために「言語人類学系社会記号論」の枠組みを示し、それを応用した翻訳理論の分析手法を素描した。そしてこのような作業を通して「翻訳等価構築」「翻訳イデオロギー」に関するテーゼを定立した。そして、この理論的な枠組みに依拠して、これまでの翻訳諸学説をすべて〈等価構築〉の視点から、「言語等価論」およびその展開としての「社会等価論」「等価誤謬論」「等価超越論」「等価多様性論」という分類で検討し直した。

まず第3章では、翻訳の言語テキストの側面に焦点を当てて諸学説を展開している「言語等価論」を取り上げた。ここではまず、3.1で導入的な等価性全般の議論を行い、3.2で近代以前の直訳 vs. 意識の二項対立図式やこれまでの諸学説の社会文化史を広く説明した。次に、3.3「翻訳等価」、3.4「翻訳シフト」、3.5「翻訳ストラテジー」、3.6「翻訳プロセス」という論点の順に諸理論を分析・批評した。翻訳というコミュニケーション出来事において語用論的・機能的等価を構築するために、コードレベルで二言語がどのように「シフト」しているのか、また効果的に等価を構築するための「ストラテジー」にはどのようなものがあるのか、そして等価構築のための「(認知)プロセス」はどうなっているのか、という諸論点である。最後に等価学説の社会的機能に

ついて、動的等価論を取り上げて検討した。

次に、第 4 章では以下の「社会等価論」「等価誤謬論」「等価超越論」「等価多様性論」の諸学説を分析・検討した。まず、4.1 で翻訳を社会行為として見る視点から諸学説を展開している「社会等価論」を取り上げた。これには「テキストタイプ論」「目的（スコパス）理論」「レジスター分析」「多元システム理論」「翻訳規範論」などを論点として取り上げた。これらは主に目標言語文化のなかで翻訳がどのような社会的機能を有するかを論じる学説群である。

次に、4.2 で文化的・イデオロギーの転回を遂げたとされている翻訳学の諸学説群である「翻訳誤謬論」を検討した。これは翻訳行為の言語的側面から目を社会的・文化的・政治的コンテキストのほうへ向けた学説群で、「書き換えとしての翻訳」「ジェンダーの翻訳」「ポストコロニアル翻訳理論」「翻訳の（不）可視性」「倫理性と異化翻訳」「翻訳の権力ネットワーク」などを取り上げた。これは翻訳学における「文化理論」と位置づけられ、言語的な等価だけに議論の焦点を当てることを批判するいわば「等価誤謬論」であると本稿では位置づけられる。

さらに、4.3 では「等価超越論」と題し、翻訳が前提とする意味の伝達という前提的イデオロギーを原理的に問い直す知的運動として考えられる翻訳哲学や翻訳思想が扱う問題系を取り上げた。等価概念では解決のつかない言語の「他者性」「異質性」「よけいなもの」とどのように向き合い超克するか、等価をどう超越するかという点に、翻訳者の使命があると考える地平が「等価超越論」である。

最後に 4.4 で、翻訳をめぐるテキストとコンテキストの多様性に焦点を当てた、「等価多様性論」について検討した。テキストに関しては翻訳の分野・ジャンルの多様化に伴って、翻訳等価のあり方が多様化していることを中心に、いくつかのジャンルの特殊性について言及した。コンテキストの多様性は、主に翻訳史という時間軸と、地域別という空間軸との様々な交点が織り成す多様性であるが、本稿ではその論及の可能性を示唆するに留めた。

これらの議論を受けて、第 5 章では翻訳等価性、つまりは翻訳自体をめぐるイデオロギーについて検討した。まず 5.1 で、研究（者）の立ち位置やスタンス、目的や達成しようとする理論的機能などによって翻訳や等価性に関する概念化（カテゴリー化）が異なることを指摘し、記述的翻訳研究の非中立性・イデオロギー負荷性などを見ていった。そのうえで、関与的・介入的翻訳研究のアプローチをいくつかの類型に分けて分析した。そして、5.2 でこれまでの諸理論の相対化を図りつつ全体の布置を素描した。最後に第 6 章として、社会記号論に依拠した言語記号の多層的機能について確認しつつ、翻訳メタ理論研究の課題の検証と今後の展望について述べた。

以上のように翻訳研究の諸学説の〈全体像〉を見据えたうえで、本稿が分析・検討する翻訳等価に関する諸学説が、単に時代遅れの等価本質論であり、無意味なものであると周縁化するのではなく、〈等価構築〉という観点から、翻訳行為の社会文化史的コンテキスト、翻訳者・翻訳研究者の言語・翻訳イデオロギー、翻訳テキストの等

価構築性の三側面の有機的な相互連関を考えながら、「社会—翻訳者—言語」の関係性の原理的な解明を行う視点に立ったうえでの「翻訳等価論」を検証しつつ、新たな論を構築してゆく可能性を展望したのが本稿の趣旨である。

結論は以下のとおりである。

1. ミクロレベルの翻訳テキストについては、 $TT^e = f(s, t, i)$  において、翻訳テキスト ( $TT^e$ ) は (s) 起点テキストを指標し、(t) 目標言語内の他の類似するテキストを指標し、さらに (i) メタ語用的円環プロセスのなかで自身のコ・テキストをも指標し (自身が属するジャンルや自身のアイデンティティを指標し)、詩的機能を反映した等価な翻訳テキストを構築してゆくのが翻訳行為である。つまり、翻訳は三面的間テキスト性の指標性 (精確には指標的類似性) をもった、弱い儀礼性のある行為であることが確認された。この指標の三面性が翻訳を翻訳たらしめる最大の特徴であり、この3つの指標性の交点がメタ語用的フレームとなって立ち現れ、理念的にはこの3変数の関数として捉えられる。そして、社会記号論では、この  $f$  つまりメタ語用解釈によるテキスト化の機能 (メタ語用論的編成力) として、数多くの社会機能性が同時多発するのが言語コミュニケーション行為の実際であると言われている。ところが、翻訳研究の文脈において、認知的・語彙意味論的側面の類像的な等価構築行為のあり方に翻訳研究者の意識は集中しがちであることが確認された。翻訳研究においても、社会指標性 (前提的指標と創出的指標) と象徴性 (翻訳イデオロギー) が必然的に負荷となってメタ語用論的編成力に影響することを理論化する必要があることについても了解された。

また、専ら翻訳の合目的性に焦点を当てる学説、翻訳者コミュニティ内の規範に焦点を当てる学説、あるいは翻訳の非合目的性・イデオロギー性を前景化させてその改善を図る社会改良主義の学説、起点=目標の二項対立や意味の伝達自体を脱構築・解体する哲学・思想系の学説など多岐に亘る学説が数多く提出され続けている。しかし、社会記号論を土台に、翻訳出来事のいま・ここを基点にした翻訳論を展開し、各論点の展開と諸論点間の体系化を図ることで、諸説が翻訳行為あるいは翻訳を取り巻く社会文化史的コンテクストという全体の布置のなかでどのような位置を占めるかについても論じた。

2. 翻訳をめぐるマクロレベルの社会文化史的コンテクストをも射程に入れると、翻訳の多次的等価性は、(1) テキスト・言語・社会の社会的階層内でのインタープレイ、及び、(2) 起点テキスト・目標類似テキスト・翻訳者個人の文体の指標的類似性を反映したインタープレイによって錯綜しながら生起する。そのことを前提にして翻訳出来事の一回性・固有性によって翻訳テキストが一回一回構築され展開されるという理論構成をとれば、翻訳をめぐるテキストとコンテクストの架橋が十全に行える理論的枠組みが提示できることが本稿の結論となる。また、(1) のマクロ社会的な要素と、(2) のミクロ社会的なテキスト要素に対する翻訳研究者の合理的な認識・解釈は (1) と (2) とで齟齬を生じ、特に異化などの翻訳スト

ラテジーに関する翻訳諸理論は（１）と（２）の関係性をより大きな社会文化史的コンテキストから眺めることで正当に評価しうることも確認された。

＊

最後に、異文化コミュニケーションの一環としての「翻訳」。異質なものと安易な妥協ではなく、他者の異質性にも自己の異質性にも忠実にあるべきという倫理を掲げて翻訳に取り組むことは、自立的かつ創造的に、多文化・多言語である世界の多様性を維持していく上でも、自分の中にある多様性を育む上でも大切な営みであること本稿の結論として展望した。

.....  
【著者紹介】

河原清志（KAWAHARA Kiyoshi）金城学院大学文学部准教授。専門は通訳翻訳学、認知言語学、社会記号論、言語思想論、英語教育。学問語用論の観点から、通訳・翻訳・言語・法律・メディア・教育などに関する理論言説のメタ理論研究に取り組む。

.....

